

## 初台リハビリテーション病院 (渋谷区)

初台リハビリテーション病院(医療法人社団輝生会、水間正澄理事長)は2002年の開設以来、急性期病院からの迅速な患者受け入れと、多職種による短期間・集中的なりハビリテーションの提供を徹底し、年間700人以上の退院患者の8割が自宅復帰を果たしている。さまざまな機器やプログラムを導入し、常に患者が主体的かつ意欲を持ってリハビリに取り組めるようにしている。

超高層ビルが建ち並ぶ都心・新宿駅から徒歩圏内にある初台リハビリテーション病院は、当時都内では不足していた回復期リハビリテーション医療を提供する医療施設として2002年に開設。その後外来通院や通所・訪問リハビリテーションを相次いで開設し、急性期から生活期までをつなぐ、質の高い地域リハビリテーションを担う先駆けとして全国にその名が知られるようになった。



院長の菅原さん(右)とPT部門長の中筋さん

病院に入るとまず驚くのが2階にあるリハビリ訓練室だ。700平方メートルを超える広々としたスペースの中に、数えきれないほどの様々なリハビリ機器がずらり。それらを使いマンツーマン体制でPT・OT・STなどのスタッフから指導を受けながら熱心に取り組む患者さんたちの姿に圧倒される。

「回復期病棟は173床ありますが、ほぼ常に満床です。そのほかに外来や通所リハでも毎日1

# 「短期間・集中的リハ」で自宅復帰8割超

## 生活想定しチームアプローチ徹底

00人近くの患者さんが来ますので、一日中訓練室は賑わっていますね」

案内してくれた院長の菅原英和さんがそう説明する。リハビリロ

ボットと称されるような最新のトレーニングマシンもあれば、実際の家庭環境を再現して階段の上り下りなどの生活行為を想定したりリハビリを行ったり、職場復帰を目指してパソコンなどを使う訓練をしている人もいる。同じ脳梗塞を患っても患者一人ひとりによって違う目標があり、その実現に向けて個別のリハビリプログラムが組まれている。

初台リハ病院の入院患者は100%急性期病院からだ。年間の退院者数が700人を超え最も多い疾患が脳梗塞で4割近くを締め、脳出血が3割弱、廃用症候群1割弱と続く。平均年齢は68・5歳で高齢者が多いが、平均入院日数は86・9日、そして約8割が自宅への復帰を果たしている。つまり入院前の生活に戻っているというのだ。「回復期病棟の役割は急性期からできるだけ早期に患者さんを受け入れる、短期間かつ集中的



歩行機能回復が期待できる「らくらくバランス」。操作が簡単で安全性も高い

に機能回復のためのリハビリを徹底して提供すること。そして回復を見計らいながら生活への復帰を目指した生活訓練をじわじわと取り入れていくこと。その移行へのかかわりを手厚く個別的に行うことができる医療施設なのです(菅原院長) 患者さんは誰も、少

しでも元通りに近づきたいと願っている。その思いにこたえるために重要なのは、きめ細やかで確かなアセスメントやプログラムを立案できるリハスタッフの高い専門性はもちろん、患者本人の意欲、すなわちリハビリへのモチベーションの維持・向上も重要な要素である(菅原院長は話す)。

生活期を念頭に置いたりハという点では、PT・OT・STも看護師や介護職と同じように食事介助や排泄介助などを担っているのも、医療業界ではかなり画期的なことである。「生活に戻すためには、全スタッフが患者さんの生活にかかわるの

した足に体重を載せることも患者さんにとってはとても怖いものなのですが、それも払拭できる点も良いと思いました(回復期支援部マネージャー・PT部門長の中筋祐輔さん)

昨年ある展示会で知り、脊損や片まひの患者さんに効果的ではないかと判断し、導入。すると、1回10分くらい利用しただけで、歩行時の足の振り出しや歩幅が改善するという効果が得られたのだ。画像で見せてもらうと歴然と改善していることが確認できるほどだった。

「まだ使い始めて間もないので、誰にでも同じように適用できるとは言い切れませんが、リハビリの効果が実感できると患者さんのモチベーションが高まります。身体を安定して支えられるのが、初めて使う人にも拒否されにくい、というメリットも感じています(中筋さん) 今ではらくらくバランスを使いたいとリクエストされたり、自主的に利用している患者さんもいるそう。菅原院長らも、今後適用可能な疾患や使う頻度などプロトコルを確立し、エビデンスを示したいと考えているところだという。